遠賀で過ごした幼少期

節子は明治43年（1910年）、父・高崎丈次郎、母・ますゑの5男3女の長女として、東京の小石川で生まれました。

丈次郎は当時政府の官僚でしたが、ますゑと子ども達は両親の故郷である遠賀郡島門村尾崎に戻り、幼少期を過ごすこととなります。ますゑは尾崎の増田家から高崎家に嫁入りしており、両家の家も近かったため、それぞれの子ども達も仲が良かったようです。増田家には、後に折尾愛真学園の創立者となる孝という子がいました。「増田孝著作集 第三巻 自伝」に節子の兄・太郎とは「竹馬の友」と記され、節子も幼少期を共に過ごしていたと考えられます。

大正5年（1916年）4月、島門村の島門尋常高等小学校に入学。大正11年（1922年）、丈次郎が朝鮮総督府へ転勤になったため現在のソウルへ転居し、仁川小学校、そして大邱高等女学校へ進学しました。その後、兄の病気療養のため帰国することになり、大分県別府市へ移住し、別府高等女学校（現・別府鶴見丘高等学校）に転校し同校を卒業しました。

大正15年（1926年）4月、福岡県女子専門学校（現・福岡女子大学）へ進学し、卒業。昭和4年（1929年）、九州帝国大学法文学部の聴講生となり、1年間「政治・経済・労働・法律」を専門的に学び、朝鮮・新義州で高等女学校の教師となりますが、家庭の事情で退職して帰国することとなりました。

文学の世界へ

帰国後、節子は作家を目指していたようで、二つの作品を執筆しています。1作目は昭和6年（1931年）8月に雑誌『女人芸術』に掲載された小説「支那との境」。この作品は、節子が教師として赴任した朝鮮・新義州が舞台となっており、一時期住んでいた朝鮮での体験を基に、統治下の日本人下級官吏と虐げられる朝鮮人の女性を描き出した作品です。この作品を投稿した後、節子は生死をさまよう大病を患いますが奇跡的に回復し、ますゑから献身的にキリストの教えを説かれて入信します。

2作目は、昭和14年（1939年）6月に雑誌「婦人公論」に本田小浦というペンネームで掲載された小説「山峡」です。技術者であった夫・山下利助と、日本や朝鮮のダム建設現場を転居する中で執筆したもので、宮崎県耳川にある塚原ダムの建設現場での労働者の寄宿舎生活を描いた作品です。この小説は入選し、選者であった川端康成が作家としての力量を次のように認めています。

「本田小浦さんの『山峡』は、はじめ男の作者のものではないかと疑ったほどである。小気味よく、そしてかなり手きびしくいろんな人物と事件とをきびきび運んでいる力は、相当に認められる。欠点が目立たぬという点からしても、もし一編を選ばねばならないとすると、この作であろうかと考えた」（川端康成書評抜粋）

川端康成からも認められた才能

節子は著名な文学者たちとも交流があり、昭和8年（1933年）4月、福岡県小倉市（現北九州市小倉北区）で叔父・高崎金太郎が経営する高崎印刷所で事務員として働き始め、印刷工員

高崎 節子 略年譜

■明治43年（1910年）
1月 東京都文京区小石川で生まれる

■大正5年（1916年）
4月 福岡県遠賀郡島門村の島門尋常高等小学校へ入学

■大正11年（1922年）
4月 父の転勤に伴い朝鮮・仁川小学校へ編入し、その後、大邱高等女学校へ進学

■大正12年（1923年）
7月 帰国し大分県別府市に居住
別府高等女学校へ編入

■大正15年（1926年）
3月 別府高等女学校を卒業
4月 福岡県女子専門学校へ入学

■昭和4年（1929年）
3月 福岡県女子専門学校を卒業
4月 九州帝国大学法文学部聴講生となる

■昭和5年（1930年）
4月 朝鮮平安北道新義州高等女学校で教壇に立つ
12月 家庭の事情により帰国
その後一時行方不明となる